



# 医局だより

大阪大学 乳腺・内分泌外科  
島津 研三

大阪大学 乳腺・内分泌外科は同微生物病研究所附属病院外科を前身とし、平成5年に腫瘍外科として発足、診療科再編のため平成12年に現科名となった比較的新しい診療科です。令和2年5月に野口眞三郎前教授の後任として島津研三が教授に着任致しました。令和3年度は専攻医7名、大学院生4名が入局してくれました。現在常勤医師9名、非常勤医師6名、大学院生10名、秘書および実験助手5名の計30名で診療・研究・教育を行っています。

乳癌の診断や治療体系は非常に複雑化し、高度の専門性が求められるようになりました。当科では最先端の診断・治療を提供し、患者に向き合い、その生きる希望に寄り添って

きたいと考えております。また、乳癌の診断・治療は当科だけで完結する訳ではありません。各分野のエキスパートが揃っている大学病院の強みを生かし、形成外科、放射線科をはじめ、院内の関連科・部署と緊密に連携を取りながら診療を行うことで、多方面から患者を支えていく体制を整えています。

最近の臨床の話題として、乳房再建とゲノム診療が挙げられます。乳房再建は形成外科に依

頼することが多いですが、欠損部がそれほど大きくない場合には、乳腺脂肪弁や肋間動脈穿通枝皮弁など、オンコプラスチックサージェリーの手技を用いて当科単独で再建を行うことによって、より患者の希望に沿った乳房再建術式を提案することが可能になりました。ゲノム診療について、遺伝性乳癌卵巣癌症候群「HBOC」の遺伝子検査およびそれに付随する予防的乳房切除術及び予防的卵巣卵管切除が 2020年4月より

保険適用となりました。これまでも再発乳癌患者に対するHBOC遺伝子診療を行っていましたが、今後はさらに適応を拡大し、当院の遺伝子診療部及び婦人科と連携して、積極的にHBOCの診断と手術を行っ



て参ります。当院はがんゲノム医療中核拠点病院でもあり、再発乳癌に対する遺伝子パネル検査も随時行っています。関連施設を4つのブロックに分け、その4つの中核となる病院が、周囲の病院と連携してゲノム診療を円滑に行っていく体制を整えました。そのほか、腫瘍内科医の吉波特任助教を中心として、きめ細やかな薬物療法を行うとともに、治験にも積極的に参加していく所存です。

## 医局だより

研究面では、今では当たり前となった乳癌のセンチネルリンパ節生検については、黎明期から様々な研究を行い、実用化に大きな貢献をして参りました。今後の展望としては、乳癌に特異的な抗体に核種あるいは蛍光物質を付加したトレーサーによって、切らずに体表からセンチネルリンパ節自体の転移診断を行い、転移陰性であればセンチネルリンパ節生検自体を省略する、すなわち腋窩に外科的侵襲のない手術を目指して研究を行っています。

乳癌の7割を占めるホルモン受容体陽性乳癌では、術後の薬物療法としてホルモン療法に化学療法を追加すべきかがしばしば問題となり

ます。直居准教授は乳癌の網羅的遺伝子発現データを基に、ホルモン受容体陽性乳癌の中から再発のハイリスク群を見つけ出す診断ツール「CureBest95GC」を開発しました。化学療法が必要な患者を正確に選択することができるため、本診断ツールは将来的に幅広い患者のQOL向上に貢献するものと考えています。

新体制になったばかりですが、引き続き診療・研究・教育バランスのとれた運営を目指して努力していく所存です。乳癌学会会員の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。